

# 地域の経済2018

[説明資料]

2018年11月

内閣府政策統括官（経済財政分析担当）

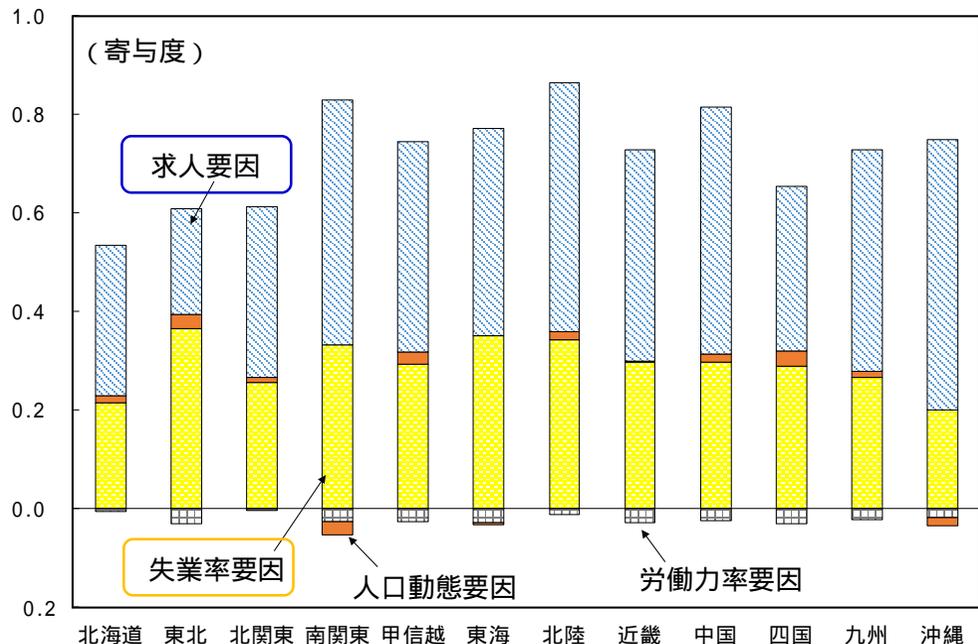
# 目 次

- 第 1 章 地域における人手不足問題
  - 第 1 節 人手不足感の地域ごとのばらつき
  - 第 2 節 地域の産業構造と労働生産性の向上
  
- 第 2 章 インバウンド需要の取り込みに向けて
  - 第 1 節 インバウンド需要の拡大と地域差
  - 第 2 節 インバウンド需要のすそ野の拡大に向けて
  - 第 3 節 今後のインバウンド需要拡大への展望
  
- 第 3 章 2017年から2018年にかけての各地域の経済動向
  - 第 1 節 景気ウォッチャー調査からみた各地域の景況感
  - 第 2 節 各地域の経済動向

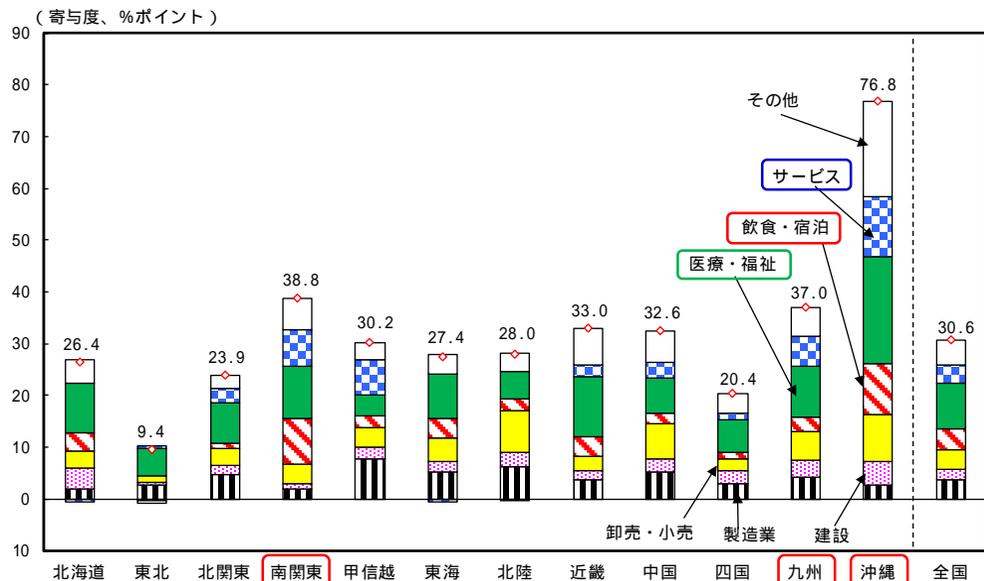
# 第1章 地域における人手不足問題（第1節 人手不足感の地域ごとのばらつき）

- 求人倍率上昇幅の地域別のばらつきは小さく、全地域で労働需給が引き締まり。
- 新規求人はいずれの地域でも非製造業を中心に創出。

有効求人倍率上昇幅の要因分解（2012年 2017年）



地域別・産業別新規求人数増加寄与度（2012年 2017年）



- ▶ 上昇幅のほとんどは求人要因と失業率(求職者減)要因。
- ▶ 概して両要因がバランス良く押し上げており、地域差は縮小。(リーマンショック前は両者とも大きな地域差があった。)

- ▶ 沖縄・南関東・九州で高い新規求人の伸び。
- ▶ 非製造業のうち、特に医療・福祉業の押し上げ幅が大きく、沖縄、近畿、南関東等で顕著。

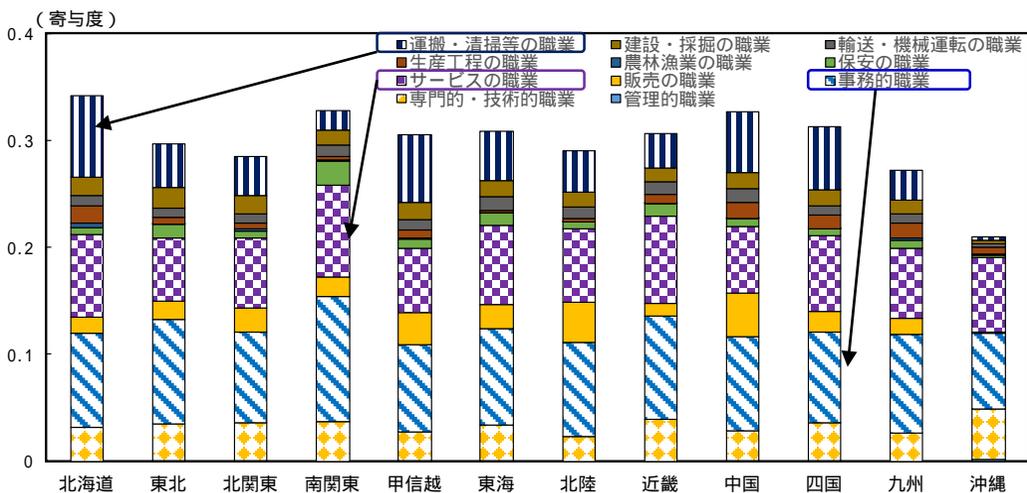
第1-1-6図(1)より  
 (備考)厚生労働省「一般職業紹介状況」、総務省「労働力調査」により作成。

第1-1-7図より  
 (備考)厚生労働省「一般職業紹介状況」により作成。

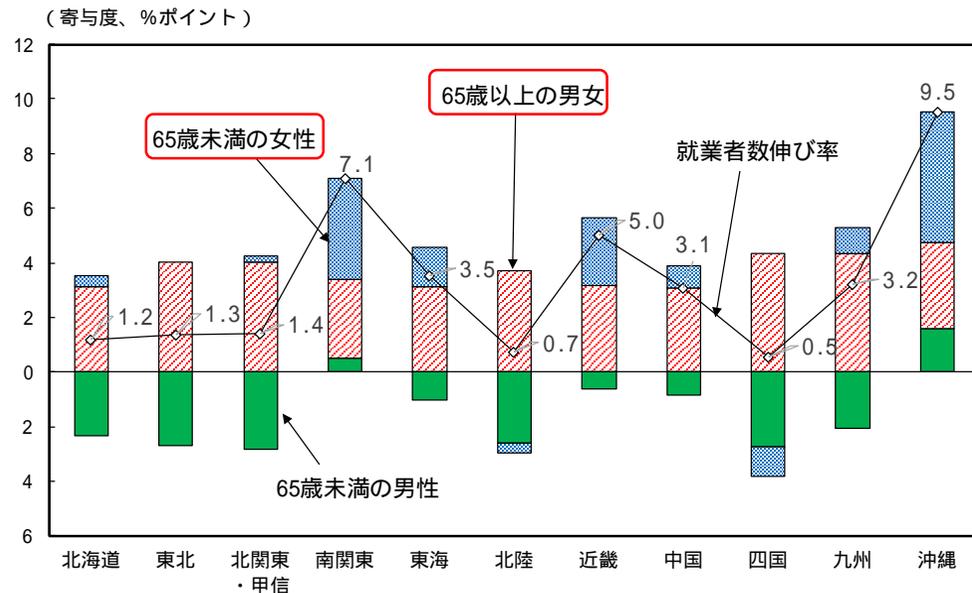
# 第1章 地域における人手不足問題（第1節 人手不足感の地域ごとのばらつき）

- 労働市場の職業間ミスマッチを地域別で見ると、沖縄のミスマッチ度が低い。
- 就業者は全地域で増加。65歳以上の就業者増は全国的である一方、65歳未満では女性就業者の増加に地域差（南関東、近畿、沖縄等で増加）。

地域別職業間ミスマッチ指標の職業別寄与（2017年）



地域別就業者数寄与度（2012年 2017年）



- ▶ 各地域で事務従事者、サービス職業従事者、運搬・清掃・包装等従事者等におけるミスマッチが大きい。
- ▶ 沖縄は運搬・清掃・包装等従事者、販売従事者のミスマッチが低い。

- ▶ 65歳以上男女の増加寄与は全地域においてみられる。
- ▶ 65歳未満の女性の増加寄与が大きな地域は、南関東、東海、近畿、沖縄等に限定される。

コラム図 1 - 1 - 3より  
 (備考) 1. 厚生労働省「一般職業紹介状況」により作成。  
 2. 常用(パートタイムを除く)の中分類(11項目)。

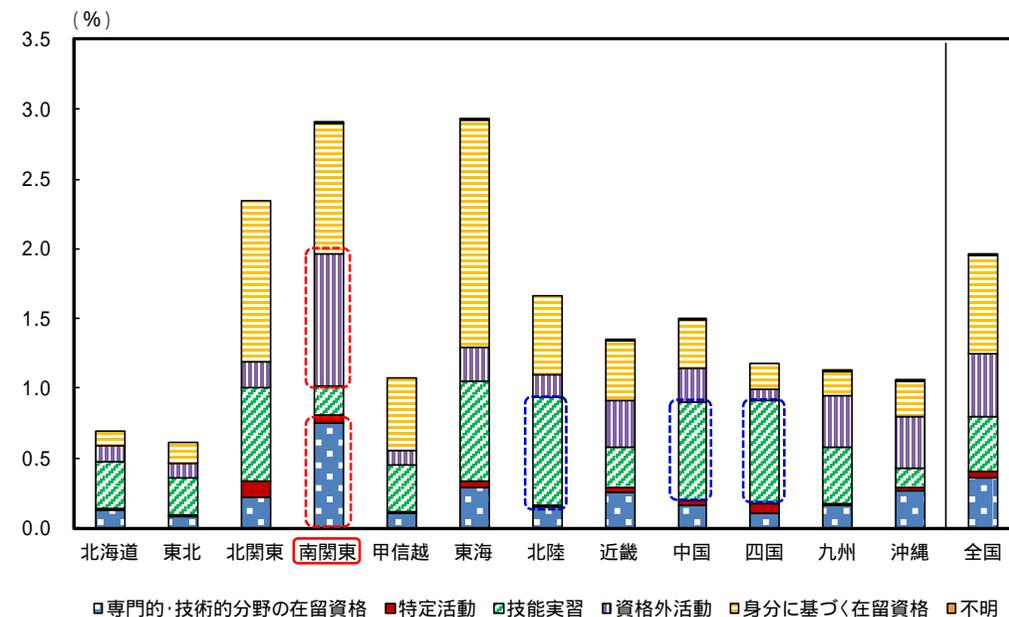
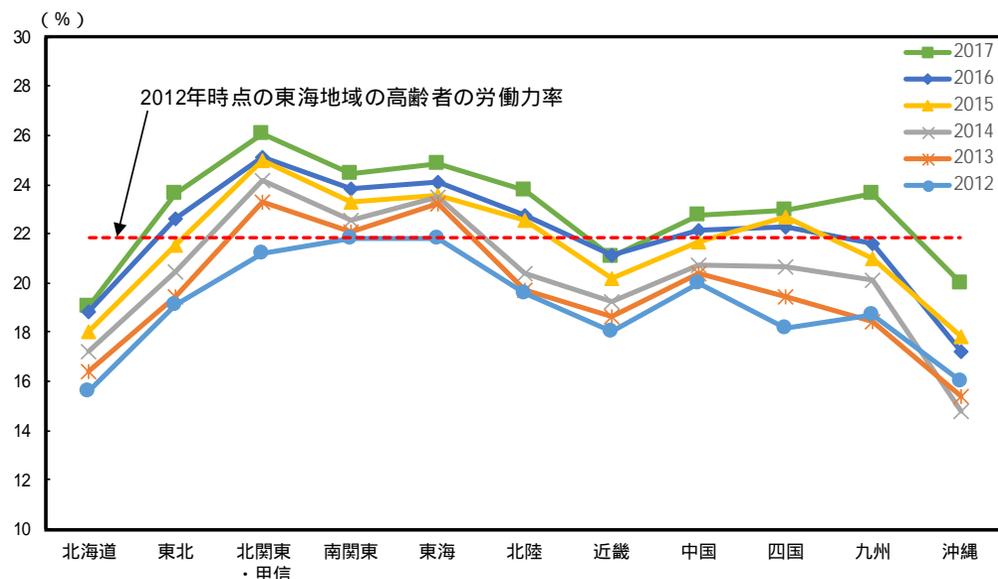
第1 - 1 - 13図より  
 (備考) 1. 総務省「労働力調査」により作成。  
 2. 女性は15-64歳、高齢者は男女65歳以上。

# 第1章 地域における人手不足問題（第1節 人手不足感の地域ごとのばらつき）

- 高年齢労働力率は全体として上昇し続けている。
- 外国人労働者は、南関東で専門職や資格外活動の割合が高い等、地域ごとの特徴が見られる。

高年齢（65歳以上男女）の労働力率の推移

在留資格別外国人労働者数の全就業者に占める割合（2017年）



- ▶ 東海、南関東、北関東・甲信で高い高年齢者の労働力率。
- ▶ 2012年時点で最も高かった東海レベルの労働力率を、2017年時点で北海道、沖縄、近畿を除いたすべての地域が達成。

- ▶ 南関東では本社機能の集中や留学生の多さ等から専門的・技術的分野、資格外活動の割合が高い。
- ▶ 北陸・中国・四国では製造業を中心とした技能実習の占める割合が高い。

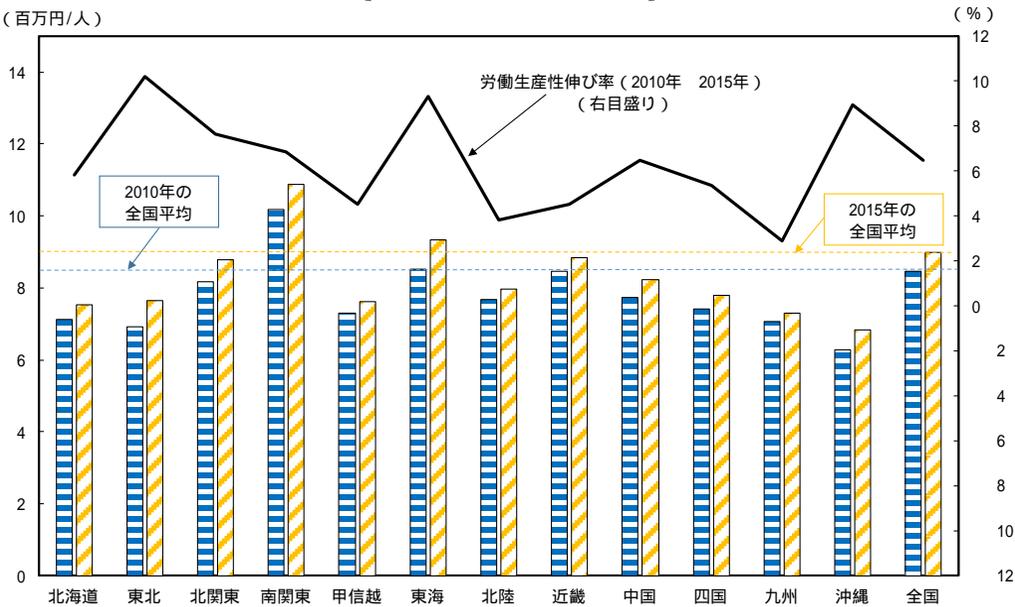
第1-1-14図(3)より  
(備考)総務省「労働力調査」により作成。

第1-1-16図より  
(備考)厚生労働省「外国人雇用状況の届出状況」、総務省「労働力調査」により作成。

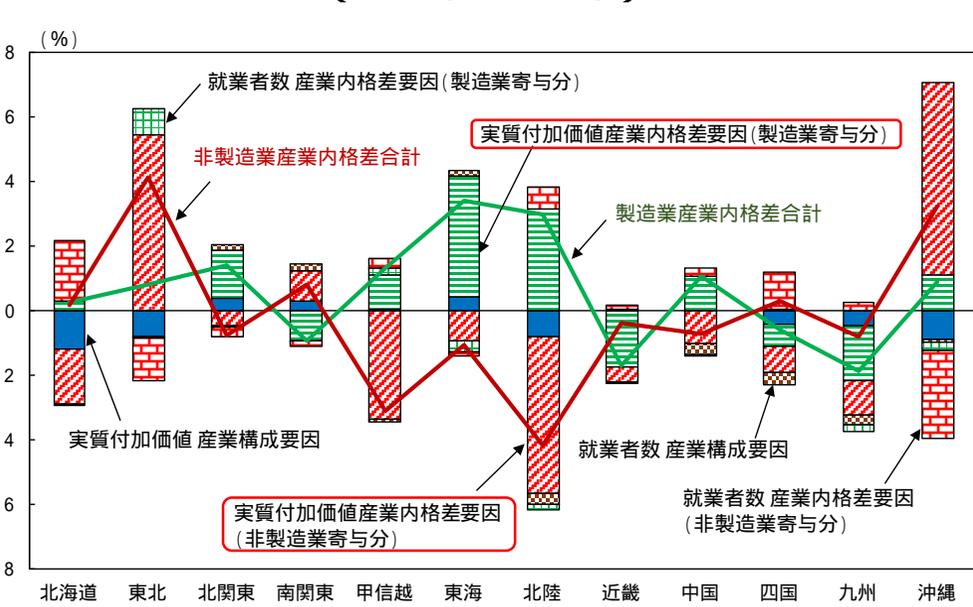
# 第1章 地域における人手不足問題（第2節 地域の産業構造と労働生産性の向上）

- 労働生産性はいずれの地域でも上昇しているが、地域差はあり生産性の底上げが課題。また、2010年から2015年の労働生産性上昇率の地域差は付加価値の産業内格差要因が主因。
- サービス業の生産性を高める等、地域の「新たな力」を掘り起こしていくことが重要。

就業者一人当たりの実質GDPの水準  
(2010年、2015年)



生産性の伸びの全国平均との差をもたらす要因  
(2010年 2015年)



- 労働生産性の水準は南関東が最も高く、沖縄が最も低い。
- 2010年と2015年を比べると、沖縄の全国平均からの乖離はほぼ変わらず、九州や北陸等、乖離幅を拡大させた地域もあり、依然として地域差が残り、労働生産性の向上が課題。

- 労働生産性上昇率の地域差を左右する要因のうち、就業人数の変化や、地域間の産業構成要因の影響は限定的。
- 主として実質付加価値(生産量)の産業内格差要因が生産性上昇率の地域差をもたらしている。

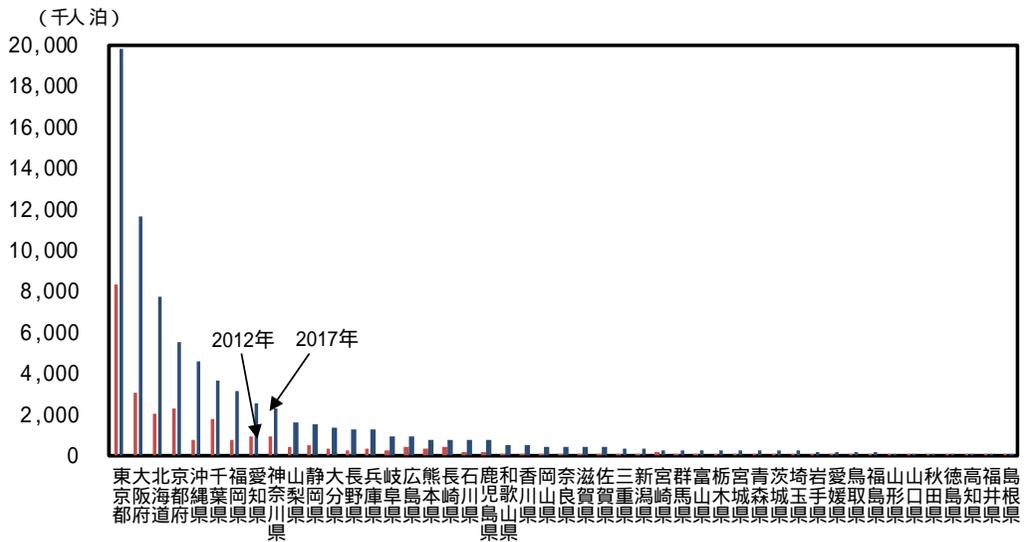
第1-2-1図(1)より  
(備考)内閣府「県民経済計算」、総務省「国勢調査」により作成。

第1-2-7図より  
(備考)内閣府「県民経済計算」、総務省「国勢調査」により作成。県民経済計算は2010年度と2015年度。

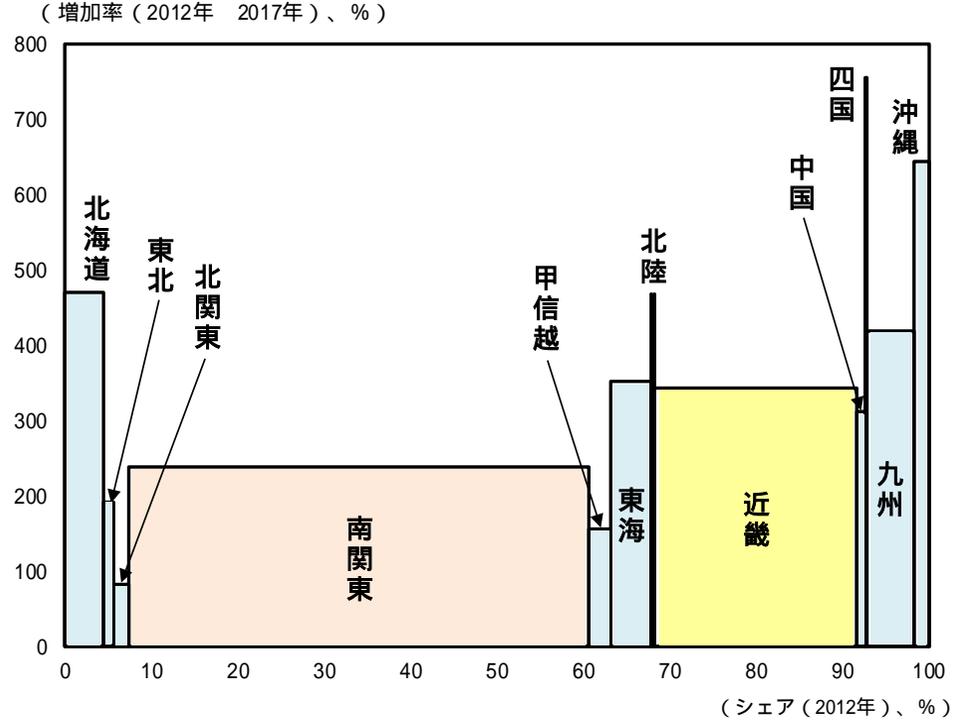
# 第2章 インバウンド需要の取り込みに向けて（第1節 インバウンド需要の拡大と地域差）

- インバウンド需要は大きな伸びを示しているが、地域別にみると大きな偏りがある。
- インバウンド需要を地域活性化に活かしていくためには、まだ知られていない地域の「新たな魅力」を訴えていく必要。

延べ宿泊者数（都道府県別）



旅行消費額の伸び（地域別）



- ▶ 東京都・大阪府・北海道・京都府・沖縄県に大きな偏り。
- ▶ 全体の訪日外国人旅行者数が大幅に増えた2017年でも偏りは大きく変わらない。

- ▶ 南関東や近畿の増加寄与が圧倒的。
- ▶ 2012年から2017年までの5年間で、四国や沖縄における訪日外国人消費額は7～8倍となっているが、そもそもシェアが小さいので、全体への寄与はわずか。

第2-1-4図(4)より  
(備考)観光庁「宿泊旅行統計調査」より作成。

第2-1-5図(2)より  
(備考)観光庁「訪日外国人消費動向調査」より作成。

- 1 潜在成長圏（訪日旅行者延べ宿泊者数上位5都道府県以外の42県）を訪れるのは、そこでしか体験できないコト消費が目当ての旅行者。
- 1 潜在成長圏を訪れた旅行者の再訪日意欲は高い。

## 潜在成長圏を訪れる訪日外国人旅行者の特性

被説明変数：潜在成長圏を訪れたか否か（訪れた：1、訪れなかった：0）  
 相関のある主な説明変数（+：有意水準10%以下で正の相関、-：有意水準10%以下で負の相関）

基本属性	年齢 (+)	国籍・地域 (ヨーロッパ・ロシア) (+)
	性別 (男性であること) (-)	国籍・地域 (韓国・台湾・香港) (-)
旅行形態	滞在日数 (+)	支出額 (-)
	訪日回数 (+)	
日本でやったこと	日本の酒を飲むこと (-)	その他スポーツ (-)
	<u>旅館に宿泊 (+)</u>	舞台鑑賞 (-)
	<u>温泉入浴 (+)</u>	スポーツ観戦 (+)
	<u>自然・景勝地観光 (+)</u>	<u>四季の体感 (+)</u>
	ショッピング (+)	日本の日常生活体験 (-)
	美術館・博物館 (-)	日本のポップカルチャーを楽しむ (-)
	テーマパーク (-)	
事前情報収集で役立ったもの	<u>旅行会社ホームページ (+)</u>	旅行会社パンフレット (+)
	航空会社ホームページ (-)	旅行ガイドブック (-)
	地方観光協会ホームページ (+)	自国の親族・知人 (+)
	<u>SNS (Facebook/Twitter/微信等) (-)</u>	日本在住の親族・知人 (+)
	個人のブログ (-)	新聞 (-)
	<u>動画サイト (YouTube/土豆網等) (-)</u>	旅行専門誌 (-)
	その他インターネット (+)	

## 再訪日意欲の高い外国人旅行者の特性

(+)：再訪日意欲が高い、(-)：再訪日意欲が低い

旅行形態	<b>潜在成長圏訪問 (+)</b>	<u>家族・親族同行 (-)</u>
	訪日回数 (+)	
日本でやったこと	日本食を食べること (+)	テーマパーク (+)
	日本の酒を飲むこと (+)	自然体験ツアー・農漁村体験 (-)
	旅館に宿泊 (+)	映画・アニメ縁の地を訪問 (+)
	自然・景勝地観光 (-)	日本の歴史・伝統文化体験 (+)
	繁華街の街歩き (+)	日本の日常生活体験 (+)
	ショッピング (+)	日本のポップカルチャーを楽しむ (+)

- ▶ 旅館宿泊、温泉入浴、四季の体感、自然・景勝地観光等を体験した旅行者が潜在成長圏を訪れている傾向にある。
- ▶ 旅行会社や地方観光協会のウェブサイトが役立ったとしている旅行者ほど潜在成長圏を訪れている。
- ▶ 一方、SNSや動画サイトを役立ったとしている旅行者ほど潜在成長圏を訪れない傾向。

- ▶ 潜在成長圏を訪問した人ほど、再訪日意欲が高い。リピーターほど潜在成長圏を訪れているので、そうした好循環を促すことが重要。
- ▶ 家族連れの旅行者の再訪日意欲が低く、そうした人々の旅行中の利便性に改善の余地がある可能性。

第2-2-1表より  
 (備考) 1. 観光庁「訪日外国人消費動向調査」より内閣府作成。  
 2. 国籍・地域については、中国からの旅行者を基準としている。  
 3. 推計方法の詳細は、付注2-1を参照のこと。

第2-2-4表より  
 (備考) 1. 観光庁「訪日外国人消費動向調査」より内閣府作成。  
 2. 国籍・地域は、中国からの旅行者を基準としており、個人パッケージ旅行及び個別手配旅行は、団体ツアー旅行を基準としている。  
 3. 推計方法の詳細は、付注2-2を参照のこと。

- ビザ免除措置やLCCの就航便数増加が訪日外国人旅行者数の増加に寄与してきた。
- LCC就航便数の増加がここ数年と同様であれば、2020年に4,000万人という政府目標は達成が見込まれる。

### 訪日外国人旅行者数の変化要因

被説明変数：訪日外国人旅行者数

説明変数	係数
実質GDP	302.442*** (13.881)
為替レート（2003年 = 100、当該国通貨建て）	2329.573*** (794.327)
ビザ免除対象	341277.300*** (76895.000)
東日本大震災	-95583.100** (43687.460)
尖閣諸島問題	-1453347.000*** (188646.500)
LCC就航便数	9466.411*** (312.554)
定数項	-644421.500*** (100838.700)
サンプル数	540
決定係数	0.781
F値	295.69***

### 訪日外国人旅行者数の将来予測

#### （推計の方法）

- 左図の推定モデルを利用し、試算
- 各国・地域の実質GDPはIMFの予測値
- 為替動向は2017年水準で一定
- ビザ発給免除措置の対象国に変化なし
- LCC便数は前年比10%増と20%増の2ケース

	2018年	2019年	2020年
LCC就航便数毎年10%増ケース	3,250万人	3,500万人	3,770万人
LCC就航便数毎年20%増ケース	3,360万人	3,760万人	4,210万人

- ▶ 訪日旅行者の居住国の経済成長が高く、為替レートが円安であるほど旅行者数は増える。
- ▶ 我が国のビザ免除措置やLCCの就航便数の増加が旅行者数を増加させている。

- ▶ LCC就航便数の増加を控えめに見積もると2020年の政府目標に達しないが、2016年・17年程度の伸びが続くと想定すれば十分に達成可能。

第2-3-4表より

- （備考）1．日本政府観光局「訪日外客数」、国際通貨基金（IMF）“World Economic Outlook”、“International Financial Statistics”、国土交通省「国際線就航状況」、外務省資料より作成。  
 2．括弧内の値は標準誤差を示す。  
 3．\*、\*\*、\*\*\*は、それぞれ10%、5%、1%の有意水準で有意であることを示す。  
 4．推計方法の詳細は、付注2-3参照。

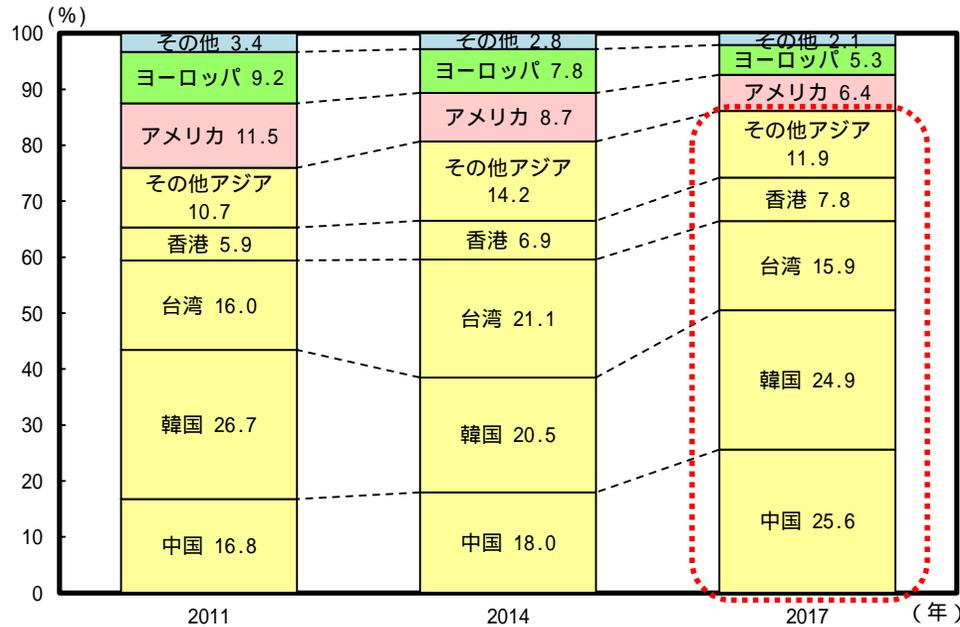
コラム表2-3-1より

- （備考）第2-3-4表のモデル式を基に国際通貨基金（IMF）“World Economic Outlook”より作成。

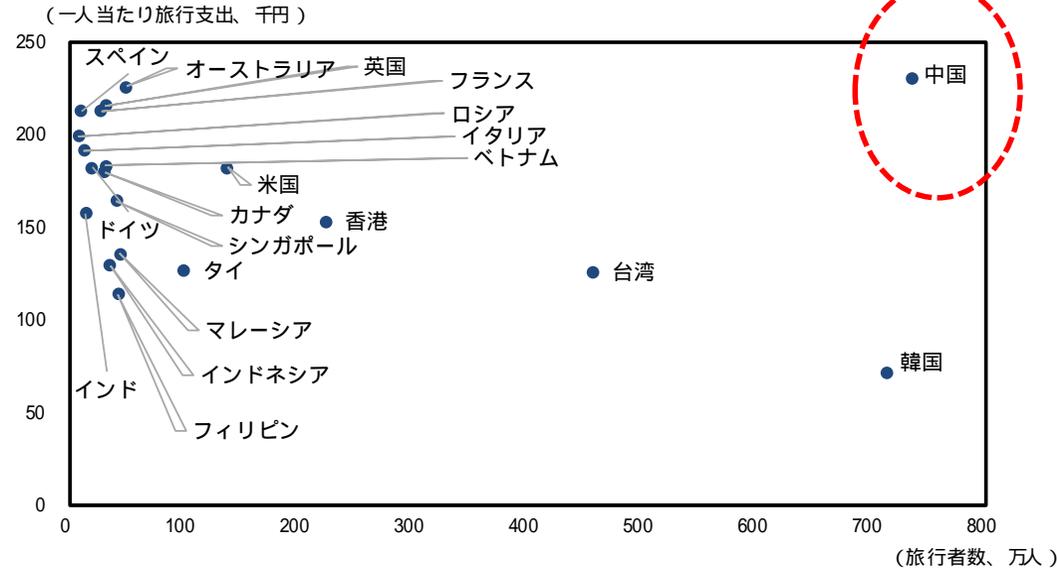
## 第2章 インバウンド需要の取り込みに向けて（第3節 今後のインバウンド需要拡大への展望）

- 1 我が国にとっては、アジア諸国が最大のインバウンド市場。
- 1 特に中国人旅行者は、人数・1人当たり消費額共に大きく、引き続きその需要を取り込んでいくことが重要。

国・地域別訪日外国人旅行者のシェアの推移



国・地域別訪日旅行者数と1人当たり旅行支出



- ▶ 我が国を訪れる外国人旅行者は、アジアからの旅行者が大半であり、その割合も拡大している。
- ▶ 特に中国が着実に増えてきている。

- ▶ 欧米豪からの旅行者は、1人当たり旅行支出は高いが、人数は全体のごく一部。
- ▶ 中国からの旅行者数は最大であると共に、1人当たり旅行支出も欧米と遜色ない。

第2 - 3 - 3図より  
 (備考) 日本政府観光局「訪日外客数」より作成。

第2 - 3 - 7図より  
 (備考) 1. 観光庁「訪日外国人消費動向調査」、日本政府観光局「訪日外客数」より内閣府作成。  
 2. 訪日の主な目的が観光・レジャーと回答した外国人旅行者を対象。